宮地嘉六著作集

第四卷

宮地嘉六著作集

第四巻

宮地嘉六著作集　第四巻
一九八四年五月三十日発行
定　価　三千円
著　者　宮地嘉六　©宮地彌生子
編集者　宮地嘉六著作集編集委員会
発行者　宮嶋　秀
印刷所　株式会社　開明堂
製本所　株式会社　松本製本所
発行所　慶友社　東京都千代田区駿河台三の七　荻野ビル
電話(二九三)八九八三

凡　例

一、本著作集の収録文は、原則として著者の単行本を底本とし、初出及びその後の刊本と校合した。著者書き入れ本のある場合はそれを参照した。単行本未収録の著作は初出によったが、収録されている著作でも特に初出によった場合がある。それらの異同などは「後記」に注記した。

一、収録文は、底本に忠実であることを原則とし、仮名遣い・送り仮名・著者固有の表現などはそのままとした。ただし、漢字は新字体に改め、明らかな誤字・脱字・句読点の欠落などは適宜加除訂正をした。

一、振り仮名は、総ルビの文も含めて難読・特殊な読みなどの最少限にとどめた。

目

次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

ひとりごとをいふ男……3
素　描……9
やきもち……27
結　婚　難……38
放浪物語……101
義妹の断髪……113
客……122
第二温泉場スケッチ……133
累……151
妻……180
真珠を持つ男……200
軍港風景……218

新開町スケッチ……231
ステーション附近……246
父を嗤ふ……270
即吟……299
後記……堀切利高……303

宮地嘉六著作集　第四巻

監修　小田切秀雄
編集　堀切利高
　　森本修
　　黒古一夫
　　宮地彌生子
　　大和田茂
印刻　宮地嘉六

ひとりごとをいふ男

ひとりで暮してゐると終日口をきかない日が続くので、そこで私はいつしか一人ごとを云ふ癖をつけたのである。終日口をきかないことはよくない。気分をますます閉塞するからである。で例へば晩酌をしながらも、少し飲み過ぎるなと思ふ時は次のやうなひとり会話をやることにしてゐる。

「もうおよしになつたが好いでせう。身体にさわりますよ。」

「さうだなあ、ぢやもうよさう。御飯にしようか。」

私にとつてひとりごとは妙に効果がある。気持の統一が得られる、独身生活の間にあつて出来るだけ自分をすさませない一つの自律自戒の方法である。口で云はないで唯思ふだけでは何故か効果が薄い。ひとりごとを云ふとその言葉の音響がいつまでも私の耳に残るのだ。その放たれた言葉がじつと私を睨みつけてゐる。言質となるのである。確実性が出来る。

私は近頃妙に忘れつぽくなつて来た。押入を開けると開けつはなしたまゝ閉めることを忘れてゐる。人から手紙が来ても返事を書いてやることを忘れてゐる。朝、顔を洗ふことさへどうかすると忘れてゐる。

「随分あなたは忘れぽくなりましたね、そんなではなかつたのに。しつかりしなくてはいけません。」

「さうだ、非常に忘れつぽくなつた。ものを考へることばかりに気をとられてゐるからだ。気をつけたいと思ふ。」

私はそんな風に常にひとりごとを云ふのだ。これは好いことを発見した。大いにこれからは一人対話をやつて見よう。恰度トランプのひとり遊びと同じだ。勝手に跋を合はせることが出来る。第一さびしい家の中が幾分にぎやかになる。といよ〳〵私はそれをやらかすやうになつたのである。幾分薄気味悪い精神病的な現象のやうにも思へるが、それでもやめられなくなつてしまつた。

「お湯にでもはいつて来てはどうです。気分がさつぱりしますよ。」

「さうだなあ、一風呂浴びて来ようか。どれ……。」

銭湯へ行くのが億劫な時でもさうなると行かずにゐられないのだ。なるほど、あのキリスト教徒のお祈りも此の行き方だな。と私は思ふ。で或る夜、寝しなに私はやつて見た。祈りの語調で。

「どうぞ神様、私の邪念をとり去つて下さいませ。私は非常に邪念の多い男であります。その為めにつまらないことに悩みます。その為めに私は偉大になれないのです。その為めに私は他人と円満に交際が出来ないのです。その為めに私は幸福になれないのです。どうぞ神様、私の心を広やかな世界へお導き下さい。アーメン。」

私はクリスト教は大嫌ひだ。あんな空虚な信仰の真似をしたいとは曽て考へたこともない。殊にあの、祈りをする時の牧師の芝居じみた語調が嫌ひであつた。だのに私はそれを真似て見るやうになつてしまつたのである。不思議に効果がある。と云つて神様と交渉が出来ると云ふのでもない。神様なんぞはどうでも好いのだ、唯お祈りのやうな語調で、自分の欠点と思ふ所を、ひとりごとでさらけ出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

して見ると何となく気持が好いのである。自分のそのひとりごとが偉大に聞へる。感情が平静になる、平らかにすうつとして来る。よく眠られる。

これはなるほど好いぞ、あの芝居でよくやるひとりごとも、まんざら不自然だと云つてしまふことは出来ないやうだ。事実俺は極めて自然に、必然的にひとりごとを云つてゐるんだ。して見ると旧劇に出て来る人物は矢張俺のやうな心理作用からひとりごとを云ふのかも知れぬ。いやさうなんだ。さうでなくては許されない筈だ。唯芝居の筋を分り易くする丈けではないのだ——ひくわ〳〵あの歌で思ひ出す。去年の月見は吉田屋で太夫とわしがつれびきに、ひいた時の面白さ、そのひくぬしは変らねど、変つたはわしが身の上——あの伊左衛門としては花道であのひとりごとを云ふのが当然のやうだ。と私は思つて見るのである。いや要するに私のひとりごとは自己暗示の方法に過ぎない。人から云はれるのはいやだ。然し自分で自分に命令するのは気持のよいものだ。反抗心も起らない。喧嘩も出来ないではないか。その意味で安全だ。私はその自己暗示を出来るだけよい方向に利用し得れば好いだらう。

「あなたと云ふ人も一こくな人間です。どうしてさうなのでせう。離婚などしないで思ひきり我慢したらよかつたでせうに。そしたら赤ん坊も丈夫に育つたでせうに。もう少し何ごとも広く大きく考へるやうでなくてはいけません。それではすべてをあなたは打ち毀すことになるでせうよ。」

「全くさうだ。ほんとうにさうだ。赤ん坊を育てる為めにもう少し冷静になればよかつた。然し運命だ。」

「さう云へばさうですがね。」

「……」

「赤ん坊にお線香でもあげてはどうです。」

「さうだ、すつかり忘れてゐた。」

時にはいやに、しんみりと抹香臭いそのやうなひとりごとが始まる。そうすると私はひとりでに立つて赤ん坊の位牌を覗いて見ずにゐられなくなる。線香をあげる。

ところで或る日もひとりごとから飛鳥山の花見を思ひ立つたわけであつた。

「家にくすぶつてゐるのはよくありませんよ。お花でも見に行つてはどうですか。」

「花を見たとて仕方がないからなあ。」

「それがいけないのです。人が花に浮かれてゐる時節には矢張その気持になつて見ることが好いのです。まあ行つて見るが好いでせう。」

「さう云へばさうだ。どれ、ぢや出かけて見ようか。」

飛鳥山までは私のところから二丁とはない。私はひとりでぶら〳〵出かけることにした。随分な人出だ。

なるほどその人ごみの中に入るとちよつと気持が軽くなる。あちらの花の下ではカツポレを踊つてゐる。こちらの花の下ではやつこさんを。

「おとーもーはつらいね、おや。あゝさて——トンツ〳〵スツトントン、チヤラチヤン、チヤラチヤン——しぶ茶でカツポレ、ヨイトナ、あせつせーおきーのーお、せつせー、」

更に向ふの一団ではお婆さんまでが躍つてゐるのだ。

「どうです。あの気持になつて見ては。」
「さうだ。なれさうな気もする。だがあの連中ほど純粋で無邪気になれないやうだ。」
「あなたは、やればあの調子になれる人なんですがね。昔はやつたぢやありませんか。少しはまだ踊れるでせう。」
「いや、もう駄目だ。腰が崩れてゐる。それに、もう昔のことを考へると冷や汗が出る。」
「あなたは直ぐ何でもさうお考へになるからいけません。昔のまゝでよかつたんですよ。」
「さうかも知れぬ。」
　私はそんなひとりごとを云ひながら酔つぱらひの群れの間をさびしく、いやに傍観的な気持でぶら〳〵歩いたのであつた。
「此の咲き乱れた桜の木ばかりの間に松が一本立つてゐるぢやありませんか。」
「さうだ。松が唯一本立つてゐる。あの松の木の気持はどうだらう。」
「さうですねえ。人は皆桜を見に来て浮かれてゐます。あの松の木を見に来てゐるものは恐らく一人もない筈です。」
「そこだて。」
「あの松の木の心はさびしいでせうか。多くの桜の木に人気を奪はれてゐるわけですねえ。今。誰もあの松を顧みてはくれません。私達くらゐのものですよ。」
「さうだ。さびしいのかも知れぬ。然しあの松は信念を持つてゐるやうだ。彼は華やかさを持たぬ。人を浮かれさせる華やかさを持たぬ。然し……」

「さうですねえ。彼は人気ものぢやありません。それを自分でも知つてゐるやうです。少しもいぢけてゐません。華やかな桜の木の中に交つてゆつたりと枝をのばしてゐます。こんな群衆に顧みられなくともよいと云つたやうに静かな誇りを持つてゐます。」

「さうだ。松は松だ。桜は桜だ。決して桜はどんな華やかさを以てしても松の存在を奪ふわけには行かぬだらう。唯此の季節に於てだけ桜は華やかさを誇ることが出来るんだ。」

「さうです。鷺と云ふ鳥がゐるから烏はそれよりも劣るとは云へません。暁に鳴くものは烏でなくてはなりませぬ。鶯がゐるから雀はそれに劣るとは一概に云へません。朝の軒場に鳴くものは雀でなくてはいけません。」

「さうだ。そのさきはどう云ふ意味になるのだ。」

「唯、烏と云ふ鳥は暁に鳴く時だけが好いのです。もうそろ〳〵家へ帰りませう。」

「さうだ、帰ることにしよう。」

人はどんな不幸な身になつてもそれ〴〵の自慰の方法を発見するものである。私のひとりごとも要するにそれであらうか……。

素描

私は仕立屋の叔母の家に三年ほどゐたが少しも上達しなかつた。家にゐた時分は男の子のくせに針を持つことが妙に好きで、針箱に近よつては継母によく叱られた。すきを見ては、そうつと、継母がしまつてゐる小ぎれを取り出して、いろ〳〵のものを縫つたりした。それが為めに父は私を仕立屋にやつたらどうだらうと云ひ出し、継母も私を家に置きたくないので賛成し、叔母の亭主が私の家に立ちよる度にその話しがあつて、十歳の暮れに私は遂に仕立屋の叔母の家へ弟子入することになつたのである。叔母夫婦には子供が二人あつた。かしらが男の子で私より五つ年下の五歳であつた。次の女の子は三つであつた。弟子あがりの職人が四人ゐた。その時分叔母の家は城下での洋服屋としては一流所であつた。弟子となると叔母もそれまでのやうに私をちやほやしてはをられなかつたので多くの弟子達が最初につとめた通りの事をさせた。他の弟子あがりの職人達に対して、また自分の亭主に対して、私を甥として取り扱つてはならないと彼女は心に定めてゐたやうであつた。そのことは父からくれぐれも云ひ聞かされてゐたので私も叔母にあまへる気持を出来るだけ持つまいと心に定めてゐたやうであつた。叔母は云つた。「お前が一番下ぢやつけんが朝も早く起きて何でもはい〳〵と云うてせんばならぬ。」さう云つて叔母は利吉と云ふ私の直ぐ上の弟子に向いて「利吉さん、大抵のことは嘉六

にさせてくいございの。さうせんば此の子の為めにならんけんが……」

でも当分利吉が朝晩のはき掃除やその他のことをした。私は彼についてそれらをした。朝、店の戸をあけたりすることは十歳の私には出来なかつたのである。尤も私は十歳ではあつたが十三四に見えるほど背丈は高かつた。が利吉は私を主人のかみさんの甥と見て最初は遠慮していたはる風があつた。尤も彼は二十の若者であつた。

私はませてはゐたが全くの子供で大して役にたゝなかつた。走り使ひが関の山だつた。それさへよくまちがへることが多かつた。釦屋に巡査の服の釦を買ひにやられた時など、私はそれを「十二三の釦」と聞きちがへたので、釦屋の店員に「十二三のボタンをおくんなさい」と云つたところ「そぎやん釦はこけえにやなか。ま一度帰つてよく聞いて来ござい」と店員は笑ひながら私に云つた。で私は聞きなほしに帰つた。それでやつと「巡査の服に附ける釦」であると分つた。それが私の走り使ひの最初の失敗であつた。「巡査釦」を「十二三の釦」と聞き、十二三の子供の着る洋服に附ける釦のことだと早のみこみしたのだ。あまり私に対して笑顔を見せなかつた叔母の亭主もその時は笑つた。

一月してお正月が来た。私はちよつと家へ帰つて来ることを叔母に許された。非常に嬉しかつた。十四五丁ほどのところを半分は駈けつた。一月ぶりに父の顔を見るのが何より嬉しかつた。継母や小さな妹はそれほど恋しくはなかつたが。

一月ぶりに見た父の顔が少し老けてゐるやうな気がした。家の中の様子もほんの僅かばかり異つて見えた。師走に女中が入り代つてゐたので、全く異つた顔の女中がゐた——私の家はステーション前に宿屋をしてゐたので女中は二三人ゐたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo